

# 発達検査と対人援助学

## ⑦フィードバック

大谷多加志

新しい職場での初年度が終わりに向かっています。職場が変わる時点では、新しい仕事の全容は把握できていなかったですが、業務量はともかく、時間の使い方が色々と工夫できる余地が多かったので、思ったよりも研究や現場の仕事に時間と体力を向けることができ、コロナ禍の影響を考慮しても充実した1年になったと思います。中でも、医療や教育の現場での発達相談の仕事は難しくも面白く、学ぶところが多かった

です。そんなわけで、今回は久しぶりに発達検査を用いた発達相談をテーマにしてみようと思います。発達相談のプロセスの中でも、最終盤である「フィードバック」を中心に取り上げます。

### 1. 発達相談の一連の流れ（実施・報告書の作成・フィードバック）

まず、改めて発達相談の一般的な流れを確認しておきます（図1）。



図1 発達相談の流れ

一般的に、最初に初回相談（インタビュー）があります。もともと発達相談を主な相談として位置づけている機関の場合は、初回相談時にそのまま検査まで実施することもあります。ともあれ、相談の主訴に応じた助言やコメントを返す必要がありますので、初回相談に来られた折に、相談の動機やニーズを確認しておくことは重要です。

続いて、検査を実施します。原則的には検査者と子どもと2人で（一対一で）実施することになっていますが、子どもの年齢や保護者の希望によって、保護者も同席している状況で実施する場合があります。

新版K式発達検査の開発者である生澤雅夫先生は、検査場面を「構造化された観察場面である」と定義しており、実際、検査場面

においては課題の成否以上に、子どもの行動観察がとても重要です。ここでどれだけの情報をキャッチしておけるかによって、フィードバックの成否はほぼ決まると言っても過言ではないかもしれません。

検査が完了したら、検査報告書を作成します。決まった様式があるわけではないですが、相談機関ごとに何となく慣例として使われているフォームがあったりします。それぞれの現場に応じて最適化された様式になっていることが多いので、基本的には機関のフォーマットに合わせて書いていけばOKだと思います。分量としては、A4用紙1-2枚程度にまとめることが一般的です。

そして、最後が検査結果のフィードバックです。検査報告書を渡すと同時に、報告書の内容について説明したり、保護者や本人からの質問・確認に応じる形で進めていきます。保護者に対する説明はもちろんですが、本人が同席している場合、子ども自身に対するコメントであることも意識しながら説明していくことが求められます。また、時にはご両親やおじいちゃん・おばあちゃん、おじさん・おばさんなど、家族総出で話を聞きに来る、というケースもあったりします。検査者としては少し動揺するかもしれませんが、基本的には、ご家族みんなが、子どものことを心配していたり理解したいと思っていたりされるのだと受け止め、精いっぱい説明を尽くすことになるかと思えます。

## 2. 報告書作成という難所(情報を整理する・要点をまとめる・言語化する)

以前にもどこかで書いた気がしますが、K式発達検査は数値的な結果から言えるこ

とがそれほど多くありません。そのため、数値的な情報以外の部分は、行動観察の結果や検査場面全体を通して見た発達の特徴、行動上の特徴などを整理して報告書を作成していきます。先ほども述べた通り、決まった様式があるわけではないのですが、新版K式発達検査2020の解説書に例が示されていますので、参考にして頂くとよいかと思えます。

以下、報告書を作成する手順について「情報の整理」、「要点をまとめる」、「言語化する」の3つのステップに整理して考えてみます。

### 【情報を整理する】

数値的な結果から言えることは少ないとは言え、数値に全く触れないというのも、それはそれで不自然な気がします。保護者の方も、検査結果として発達年齢や発達指数が算出されることをご存じである場合も少なくないので、数値に触れないことを『隠している』と受け取られてしまう場合もあります。

一方で、考えておくべきこととして、数値的な結果がその子どもの発達像をどの程度的に表現することができるのか、という点については、検査者として一度考えておく必要があると思います。例えば、「日常場面ではたくさん困りごとがあるのに、数値的な結果は平均的」という場合や、反対に「日常は特に困っていないけど、数値的にはしんどい」という場合もあります。この時、“この検査結果は正しいのか!?”と結果に対して疑義を投げかける方もおられるのですが、実際のところは「検査場面」という特殊な環境が子どものパフォーマンスに

影響しているケースが大半であるように思います。「個別対応の場であること」、「子どもの興味やペース、発達状態に合わせて課題が提示されること」など、検査場面の特殊性はさまざまなものがあります。検査場面どの要素が、どの程度影響したのかを考察しておく、支援や配慮に活かせる情報が得ることもつながります。

また、検査中に繰り返された言動や反応の傾向なども、数値化はされませんが、重要な情報です。例えば「離席（席を立ってうろうろする、検査用具を触りに来る等）」であれば、頻度も大事ですが（検査中に数回～度々）、特定のきっかけや、検査場面のどのあたりの時間帯で生じていたかによって、理解の仕方が変わります。よくあるところでは、「課題の合間で離席する」（やることがない場面／指示が明確でない場面）、「検査の後半」（疲れてくる／集中が切れる）などがあります。前者であれば、支援の例として「指示を明確にする」とか「無駄な待ち時間が生じないようにする」という対応が考えられますし、後者であれば「休憩をはさむ」とか「状況に合った形でリフレッシュできるようにする（授業中なら、前に板書しに来てもらって合法的に離席できる場面を作る、など）」という対応が考えられます。

また、発達の側面と関連づけて考えることも重要です。「授業に集中できない」という訴えがあったケースのうち、何割かは「そもそも授業がよくわからないから面白くない」という理解面の問題がベースにあたりします。そうであれば、支援は「どのように授業を理解しやすくするか」が焦点をあてて行うこととなります。

このように、“どのくらいの情報を得るこ

とができているか”、“その情報をどのように整理できるか”によってフィードバックの内容や精度はほとんど決まってくると言ってもいいかもしれません。そういう意味では、一番最初の過程ですが、一番重要であると思います。

#### 【要点をまとめる】

フィードバックに向けて、次の手順は「要約」です。検査場面における具体的な行動観察から得た情報をただ並べてみても、なんとなく冗長になりますし、情報の羅列という感じで、子どもの発達の特徴としては伝わってきません。行動観察の結果から、その子どもの特徴をうまく抽出する必要があります。ただし「注意がそれやすい」とか「言葉の理解が弱い」など、一般化しすぎるのも考えものです。例えばですが、2-3歳の子どもであれば、ほとんどの場合注意は長時間持続できませんし、言葉の理解もまだまだ未熟です。“年齢と比して苦手”という意味なのか、もう少し特徴的な苦手さを示しているのか（例えば、言葉の理解であれば、身近なものの名称はわかる、とか、擬音語・擬態語だとわかりやすい、とか）を明確にしておく必要があります。

どのように要点をまとめていくかは人それぞれやり方が違うと思います。気になった点を箇条書きにして眺めてみたり、KJ法のように視覚化して配置しながらまとめてみるなど、自分にとってやりやすい方法を工夫してみるのがよいと思います。

#### 【言語化する】

最後は「言語化」です。報告書を受け取る相手のことを考えて、伝えたいことにぴっ

たりの言葉を選んでみましょう。ついつい専門用語や、検査上の用語を使ってしまいがちですが、専門用語無しで書けるならそれに越したことはないです。できる限り誤解なく、正確で、わかりやすい言葉でまとめてみましょう。

ある程度報告書作成に慣れてくると、どうしても前にも使った表現や言い回しを多用してしまうことがあります。慣れにはそういう側面がありますし、実際に1件の検査報告書にかけられる時間は限られていますので、ある程度止むを得ないとも言えます。一方で、「その子らしさ」を記述し、伝えるためにも、時々立ち止まって、その子を表現するのにぴったりの言葉を見つけられたらと思います。「いつも同じ所見を書いている…」と悩む検査者の方ともたくさん出会いました。多分検査者がみんな出会う壁なのだろうと思います。

私の場合は、自分の中にある“感じ”を言葉にするようなイメージで、言いなれた言葉との齟齬や差異になるべくこだわって、何が違うのかを正確に言葉にしようと努めてみる、という手順でトライすることが多いかなと思います。成否はほぼ五分五分という印象で、あまりアテにはなりません。

### 3. いざフィードバック

ここまで準備ができれば、後はフィードバックに臨むだけです。検査報告書にまとめた内容を説明する形になることが一般的で、その場合はまずは報告書に沿って一通りの検査結果を説明し、その後確認したいことや疑問点などについてお聞きしていくという流れになるかと思います。

説明しているうちに、インタビューでは把

握していなかったニーズや事情があることが浮かび上がってくることもあります。「先に言っておいてよ！」と言いたくなるかもしれませんが、言い出せなかったり単に言いそびれていたたり、様々なケースがあります。準備ができなくて動揺するかもしれませんが、その都度対応しましょう。「ちょっと確認してから改めてお伝えしますね」と一度間を取るのもひとつの手です。

実際、過去に発達検査を受けたことがある子どもさんのケースでこんなことがありました。検査のニーズが「発達の経過観察」とお聞きしていて、数値的には前回とそれほど変わらず、課題への意欲や取り組み、検査者とのやりとりでは随分変化もあったので、その点を中心的にフィードバックしていたのですが、お母さんは前回とほぼ同じ「数字」の方を聞いてとてもホッとしたようなご様子でした。ちょっと不思議に思って、よくよく確認してみたところ、「実は数値が〇以下だったらゲーム機を没収しろと夫に言われていたんです」という裏事情がありました。また、ひどく緊張したご様子でお見えの様子で、フィードバックをしてから感想をお聞きしたところ、「検査結果によって障害かどうか判断されるのだと思っていて」とおっしゃった方もおられました。

フィードバックの場面は、検査者にとっても緊張感がありますが、保護者の方にとっても様々な思いや不安、緊張がない交ぜになっていたりします。相手の状況を理解して、最善の形で検査結果をこれからの生活に活用してもらえるように、十分な準備と少しだけの気持ちの余裕を持ってフィードバックに臨んで頂けたらと思います。